19

プリントアウトした請求票は、所蔵部署階のカウンターにお持ちください

2011年01月13日 11：58：50

入館証番号：

＜請求票＞
Call Slip

312.2
5029
1936

資料名：現代支那概論

巻次　：

著者名：矢野仁一／著
出版者：目黒書店　頁数　：304p 地
大きさ：19cm　出版年：1936.3

所蔵館　：中央
所蔵部署　：1階資料お渡し・返却カウンター
配置場所　：1/65A 中)MB1書庫A
資料ＩＤ　：5001817337

一	社	人	自	東	新
↓					
二	社	人	自	東	新

力	事
請求	報告

MB１	ﾏｲｸﾛ	B1	ｱﾙﾌｧﾍﾞｯﾄ	原紙	縮刷	
MB２	ﾏｲｸﾛ	B2	洋	中	朝	

行	1F	B1	B2		
多	児	青	1F	B1	B2

切り取り

2011年01月13日 11：58：50

入館証番号：

Call Slip

＜請求票＞(控)

書名
資料名：現代支那概論
巻次　：動く支那
著者名：矢野仁一／著
出版者：目黒書店
出版年：1936.3
大きさ：19cm
頁数　：304p 地図5枚

所蔵館　：中央
所蔵部署　：1階資料お渡し・返却カウンター
配置場所　：1/65A 中)MB1書庫A
資料ＩＤ　：5001817337

請求記号
312.2
5029
1936

序1~2
目次1~2
本文 205~222

現代支那概論——動く支那

序

本書は主として支那の數千年來の傳統の力に依つて維持せられたる道德的觀念の國家組織が、世界歷史の大勢に順應し、或は順應しきれずして崩壞しつつある波瀾重疊の迹を尋ねんとするものである。私が十數年前「近代支那論」や「現代支那研究」によりて、現代支那に關する私の見解を以て世に問ひたる以來、支那の邊疆地方に起りたる變化は實に人をして驚心動目せしむるものがある。本書中に收めたる論文中、若干此等の問題に關して曾て「外交時報」

現代支那概論—動く支那

目次

支那の邊疆問題の一—支那の邊疆問題の概觀……一
支那の邊疆問題の二—外蒙古の問題……一五
支那の邊疆問題の三—內蒙古の問題……二四
支那の邊疆問題の四—西藏の問題……三五
支那の邊疆問題の五—新疆の問題……四二
支那の邊疆問題の六—雲南邊界の問題……六八
歷史上より觀たる蒙古問題……八二

序

や「經濟論叢」乃至「東亞經濟研究」に揭載したる舊著に補訂を加へたものもないではないが、また本書の爲めに新たに稿を起したものも少なくない。本書は主として支那問題の變動的、發展的、時局的なるものに就いて觀察し論究したるものであるから、主として其の本質的なるものに就いて觀察し論究したる本書の姉妹篇「現代支那概論—動かざる支那」とは正に對蹠的なるもので、相助け相合して私の現代支那に對する最近の見解を示すものである。

昭和十一年三月

著者

ものであるから、清代において之を假借しなかつたことは當然であるが、今や清朝が滅びて漢民族を中心とする民國となつた以上、もはや其の存立の意義を失つたものといはなければならぬ。然し清代において教匪と相並んで秘密結社の一半を形成してあれ程盛んであつた會匪は忽焉として其の影を絶つたであらうか。蕭一山君が天地會、洪門と異名同質であるといつてをる青幇が今日北支那だけでも六十萬人を算し、鬱然たる勢力を成してをるといふのでないか。天地會、洪門の徒は清代に起り滅滿復明を以て徒衆を煽誘し嘯聚したことは事實であらうが、眞の動機は種族主義に出づるものでないことは明かである。私は教匪でも會匪でも、宗教主義だとか、種族主義だとか政治主義だとかの主義の運動などゝは考ふべきものでなく、支那の政治が人民の福利を增進し、繁榮を齎らし、其の眞の要求を充さんとするものでない爲め、人民が政治以外の手段に依つて自から其の福利を求め繁榮を圖らんとする運動に外ならないものと考へる。

北支那の問題と支那の本質問題

一

一時非常に切迫したやうに傳へられたところの北支那問題もどうやら南京政府が全面的に日本の要求を承諾したことによつて解決することになつたやうである。然しこの北支那問題は既に一旦一昨年（昭和八年）五月の塘沽停戰協定によつて解決したところの問題で、それが今度また問題となり、また解決することになつたといふことは實はをかしい話で、他國ならばそれだけでも問題となることゝ思はれるが、支那だけに問題ともならないのである。塘沽停戰協定において、支那軍は速かに北平、天津の北方の昌平とか、順義、通州、寶坻、蘆臺などの線より西及び南の地に退き、決してこの線を越えて前進しない、また挑戰行爲、攪亂行爲を行はないといふことを約束したのであるから、支

那がこの約束を守りさへすれば、北支那問題は再び問題になるやうなことはない筈である。然るに支那はこれを守らない爲めにこの度また問題となつたのである。北支那問題は塘沽停戰協定で一旦解決したやうに見えたのであるが、實は解決しなかつたのである。今度も支那が日本の要求を承諾して、この問題は再び解決したとしても、それでこの問題は永久に解決したかといへば、私は決して解決しないと思ふのである。

一體支那が停戰協定を締結した際に、これを守る考へであつたならば、よほど腹を決めてかゝらなければならぬ筈である。規定の線を越えて前進しない、挑戰行爲を行はない、攪亂行爲を行はないといふことは、結局滿洲に對して挑戰行爲を行はない、攪亂行爲を行はないといふことで、間接に滿洲の獨立を承認するといふことに外ならない。それ故最初から滿洲の獨立を承認するといふ腹を決めなければ、停戰協定は結ばれないわけであるが、支那はさういふ腹などは決めず、つまり本當に停戰協定を守る考へなどはな

く、停戰協定を結ばなければ、日本軍は長驅して天津、北平に攻入るやうな形勢があつたから、攻入られては大變だ、焦眉の急を救ふ爲めには、何も彼もいつてをられない、また考へてもをられない、後のことは後で考へるとして、一先づ日本軍を喰止める爲めには之を結ぶより外に仕方がないといふ考へで結んだのが、この停戰協定である。初めから停戰協定の結果は、滿洲の獨立を承認することになるがなどゝ深く深く考へて結んだものではないのである。つまり本當に停戰協定を守る考へで結んだのではないのである。

それと同じやうな例は、丁度今から七十七年程前の西曆一八五八年にもあつた。當時英吉利、佛蘭西の同盟軍は、白河を溯り、天津まで侵入したので、支那は先づ之を白河から退けなければならないといふ焦眉の急に迫られ、何も彼もいつてをられず、天津條約を締結し、英吉利、佛蘭西の公使の北京駐在を承認し、また英吉利、佛蘭西の公使や

使節などが、支那の皇帝に謁見する場合に、從來は三跪九叩頭の禮といつて非常に繁縟にして屈辱的な禮を行はなければならぬことになつてゐたのを止めて、そんな禮を行はなくともよいといふことを承認したのである。外國公使の北京駐在を許すといふことは外國の代表者たることを承認するといふことである。また三跪九叩頭の禮といふのは、一度跪くごとに三度頭を地に叩きつけ、それを三度繰返へすといふ非常に屈辱的な禮で、清朝の時代においては、この三跪九叩頭の禮は朝廷の儀式となつてゐた。非常に特色のある儀式で、地方官でも駐外官でも、朝廷から何か恩賞を蒙ぶるとか、難有い恩旨を蒙ぶるとかいふやうなことがあれば、香案といつて、机を設け香爐を供へて、遙かに北京の宮闕を望んで三跪九叩頭の禮を行つて皇恩を謝することになつてゐたのである。京官でも外官でも支那の官としては當然であらうが、清朝時代までは外國も支那の屬國であるといふ建前であつたから、外國の公使や使節などは支那の陪臣であるといふ考へで、

やはり三跪九叩頭の禮を行はなければ支那の皇帝に謁見ができないといふことになつてゐたのである。天津條約でそれを用ひずして謁見を許すといふことを約束したことは、これは外國の公使や使節などは獨立國の君主を代表するものであるといふことを承認したものであるから、本當に天津條約を實行する考へであれば、其の時において既に外國の獨立を承認する覺悟を決めなければならぬ筈であるが、そんな覺悟などはなく、たゞ北京と目と鼻との間にある天津まで乘込んで來てをる外國の軍艦を退くるといふことを急務として、後の結果などを考へてをる暇なく倉皇として條約を結んだのである。つまり本當に條約を守るといふ考へなどがなく結んだのである。それ故外國公使の北京駐在の問題も外國公使の謁見の問題も天津條約で解決された筈であつたが、解決されずしてまた一度も二度も問題となつたのである。一八七三年に朝廷の諸臣が外國公使は三跪九叩頭の禮を行はなければ皇帝に謁見することを許すことができないといつてひどく爭つ

た時、吳可讀といふ御史は請レ令三各國使臣進見不二必跪拜一疏を上つり、外國人は犬猫のやうなものだから、之に中國の禮節を行はせなければならぬなどゝいつて爭ふのは、丁度犬猫に人間の禮節を行はせるやうなもので、之を行はせたからといつて人間はそれが爲めに價値を加へるとか重きを加へるとかいふことがないと同樣、外國の公使などに中國の禮たる三跪九叩頭の禮を行はせたからといつて、中國がそれによつて重きを加へるといふことはないといつて、之を爭ふことのつまらないことを論じたことは有名な話である。

二

私はかういふことを考へてをる。支那は民國になつてから二十四年になるが、支那の問題は何一つとして本當に解決したものはないのでないかといふことを考へてをるのである。解決したやうに見えた問題もあるが、其の實は一つとして本當に解決してゐないのでないかと考へるのである。例へば支那の統一の問題である。昭和三年に蔣介石は遮

二無二北伐を決行したのである。途中で南京事件を惹起し濟南事件を惹起しながら、人觸るれば人を斬り馬觸るれば馬を斬るといふ概で遮二無二北伐を決行し、南北統一を完成したのである。北京の西山の碧雲寺の孫文の靈前で北伐成功報告祭を擧行し、英靈の加護に依り北伐三年で支那は統一を完成したといふ祭文を讀んだのである。さうしてこれで軍政の時期は終つた、これから訓政の時期に入るのだと宣言したのである。恰かも支那の統一の問題はこれで解決したやうに思はれたのである。然るにやっと統一したかと思ふと直ぐまた後から壞れるやうになつた。北伐成功によつて解決したやうに見えた統一問題は、實は解決しなかつたのである。北伐成功の時、これでもう終つたといつた軍政はなかゝゝ終るどころでなく今日も猶ほ續いてをる。蔣介石は今日も軍政を指揮し共產軍の征伐に從事してをる。さうして西南派を抑へて再び統一を完成せんとしてをるやうであるが、縱令それが完成したとしても、支那の統一問題はそれで永久に解決し軍

政時期は永遠に終ることになるであらうかといへば、私は決してならないと考へるのである。丁度石鹸玉のやうなもので、一旦は膨れても直ぐにまた壊れるのが支那の統一問題である。今、蔣介石は折角石鹸玉を膨かしてをるが、膨れても直ぐまた壊れるやうなものを、何故そんなに骨折つて膨かしてをるのかと思ふと、傍で見てゐても氣の毒の感に堪へないのである。

三

私は支那においてはあらゆる問題は本當の解決ができない、何一つ本當に解決せられないといふこと、これが支那の本當の問題、本質的の問題でないかと考へるのである。時々起つては一時世界の耳目を聳動するやうな緊張狀態を示すところの所謂時局問題などは、實は一時性の枝葉末梢の問題に過ぎないもので、それもこの本質的の問題が解決せられなければ本當に解決されないのではないかと考へるのである。

何故支那においてあらゆる問題は本當の解決が出來ないかといふことについては、色色の理由を指摘することができる。

第一は支那の歴史、傳統の力である。この支那の舊い歴史、傳統の力といふものは非常に大きいのである。これはいかなる外來の文化、いかなる外來の制度、文物もそれをして其の効果を發揮せしむる前に支那化せしむるに餘りある力である。例へば日本などにおいては、西洋の制度、文物などを模倣して相當に効果をあげてをるのであるが、支那においては、隨分從來も模倣に努めまた今日もそれを努めてをるに拘はらず、其の弊害ばかり多く、何一つ十分なる効果をあげることができないのである。大概支那の舊い歴史、傳統の力に引きずられて退化する。支那の惡い弊害に陷つて其の効力を失つてしまうのである。露西亞の共産主義なども支那に這入ると、匪賊化してしまうのである。これなどは善いか惡いかは分からぬが、傳統の力のいかに大なるかを示す適例である。

四

第二は支那人は支那において最も貴重なものは何であるか、支那において最も貴ぶべき價値のあるものは何であるかといふことを認識せず、却つて價値のないつまらないものを重要視し貴重視して、それに一生懸命になつてをるやうに思はれることである。つまり最も價値のある最も大切なものを大切にしないで、價値がなく大切でないものを大切にしてをるやうに思はれることである。支那において最も大切なもの、最も價値のある貴重なものは何であるかといへば、私は過去數千年間において支那の偉大なる祖先、先聖、先賢によつて創造され養育され保存された支那の道德的、精神的の文化であると考へるのである。五倫五常のやうな禮教を主とした道德的、精神的の文化であると考へるのである。これこそ世界の文化に寄與すべき貴重なる價値のある文化で、かういふ立派な價値のある道德的の文化が基礎になつてこそ、支那の領土が大きいといふこと、人

口が多いといふことも始めて價値を生ずるものと思ふのである。さういふ基礎がなくして、たゞ領土が大きといいふこと、人口が多いといふことだけでは、少しも價値がない、何も貴ぶに足らないと思ふのである。私は常に小さくとも本當に立派な完全なものこそは本當に大きいものであり、形だけが大きくとも不完全な缺點の多いものは實は小さいものであるといふことを信じてをるのである。小さくとも立派な完全なものは、世界に影響を及ぼし後世に影響を及ぼす力が大きいのであるから、缺點だらけの不完全な形ばかり大きいものより遙かに大きいといつてよい。支那の領土が大きいといふこと、支那の人口が多いといふことは、支那としては一番つまらない一番價値のないものである。支那の祖先の殘した遺產の中で最もつまらない價値のない遺產である。禮教を主とした道德的な精神的な文化こそは、實に世界に誇るべきまた世界の文化に貢獻すべき最も貴重なる最も價値の多い遺產で、これが基礎となれば、最初は小さくとも、それ

こそ孟子にいつてある理論は作用するやうになり、其の四方近隣にをる人民は段々之に歸服することになり、農民は其の國の農民たらんことを希ひ、商民は其の國の商民たらんことを希ひ、士紳は其の國に官仕せんことを希ふやうになつて、段々大きくなるわけである。かういふことで大きくなつた大きさこそ立派な價値のある大きさである。もはや石鹼玉ではない。立派な充實した大きな寶玉である。もう壞れることはない。支那の人民は始めて支那人と生れた幸福を感ずるであらう。形ばかり大きな支那を形式的に恢復して見ても、石鹼玉のやうな內容の空虛なものでは、人民が其の心から支那人たる名譽、支那人たる幸福を感ずる筈はない。これでは死を賭して支那の名譽、利益を防衛して惜まない氣にはなれない筈である。それだから石鹼玉で、膨れた後から直ぐ壞れるのである。結果如何を考慮せずに停戰協定を締結したり、また之を破つて結果如何を顧みないといふこと、また一旦完成しても直ぐ後から壞れるやうな統一の爲めに浮身を窶す

といふこと、さういふことは皆形の大きな支那を恢復したいといふ一念に驅られてをる證據である。支那において最も價値のない、最もつまらないものを大切にしてをる證據である。

五

第三は支那人は支那の究極の利益の爲めにかうでなければならないといふ考へを定め、之を實現する爲めに難を避けないといふ眞面目な精神がないといふことである。日本の維新でも、米國の建國の初めの憲法の爭ひでもまた南北戰爭の時でも、支那人よりは遙かに眞面目であつたやうに考へられる。日本では佐幕と勤王とに分かれて爭つたのであるが、佐幕でも勤王でも自分の主義信念の爲めには身命を賭するといふ眞摯なる態度があつた。それ故其の爭ひたるや非常に激烈であつたが、それだけ佐幕でも勤王でもどちらか一方が勝つか負けるかすればそれで日本は統一するといふことになつたのであ

る。それと共に日本の統一の問題は永久の解決を告げたのである。米國でも建國の初め各州の權力を重くすべきか、それとも各州を聯合して組織する合衆國政府の權力を重くすべきかといふ問題の爲めに烈しく爭ひ、また一八六〇年代においても奴隷使用の問題の爲めに南北相分かれて戰ふに至つた程烈しく爭つたのであるが、それだけどちらか一方が勝つか負けるかすれば、問題はそれで解決するといふことになつたのである。然るに支那においては、第一支那の國家百年の利益の爲めにはかうでなければならぬといふ長計を考へるものもないやうであるが、それを考へるものがあつても、死を賭してもそれを實現せんとする眞摯な態度、眞劍さがないやうである。國家百年の利益から考へて決して得策でないといふことが分かつてゐても、またそれが自分の平生の主張信念に反してゐても、大勢不利と見れば一身の危險を冒してこの大勢に逆抗するといふやうなこと、この風潮に逆ふといふやうなことは決して之を敢てしないのである。一つはさう

いふ危險を冒すといふことは支那ではそれだけの効力がないといふ爲めでもあらう。日本などでは縱令自分は失敗することが分かつてゐても、却つて其の失敗によつて後から其の志を繼ぐものをして憤起せしむるといふことにもなり、必ずしも無効でなく、身を殺して志を成すといふことになる場合も少なくないが、支那では自分が失敗すれば失敗しただけで後に何の効果も殘さないのであるから、それこそ犬死にで何にもならず、危險を冒すだけの價値はないのである。死に甲斐がないのである。一つはさういふこともあつて、支那人は自分の主義信念に殉するといふ眞面目さがなく、大勢によつて向背を變へ、心にもないことを贊成し、自分の考へに反することでも平氣で贊成するといふ有樣で、それで當るべからざる大勢を成し、風潮を馴致し、それで問題は解決するやうになるのであるから、本當の解決にならないのは當然といはなければならぬ。心の底では贊成しないが表面贊成したことになつて、其の爲めに統一したやうな統一では眞の統一

にならず、直ぐに壞れることになるのは當然である。私は支那においては本當の意味での內亂といふものもないのでないかとも考へる。本當の內亂なれば主義信念の爭ひである。それ故どちらか一方が勝つか負けるかで、それと共に國家の統一はできるわけであるが、支那の內亂は主義信念の爭ひでなく、私利私益の爭ひ地盤勢力の爭ひである。さうでなければ匪賊の討伐である。私はこれが支那においてあらゆる問題が解決しない一の重要な原因でないかと考へる。

六

第四は支那人は條約を守る精神がないといふこと、條約を守る精神で條約を結ばないといふことである。今度の北支那の問題も其の適例である。外にも數限りなく其の例がある。支那の外交の二重性といふものもこれから來るのである。清朝末のことであるが、支那は日清戰爭の軍事賠償金支拂の爲めに一方において露西亞と借款の談判を進め

ながら、また一方において英吉利との借款の談判を進めたことがある。兩方から借款をなすといふことの到底出來ないといふことは、初めより分かりきった話であるに拘はらず、兩方に對して支那は本當に借款をなすやうな樣子をしたのであるから、終に二進も三進も行かなくなつて、支那は其の爲めに英吉利にも色々な利權を讓らなければならなくなり、露西亞には旅順口、大連灣の租借を許さなければならなくなつたのである。條約を守る考へがなくして條約を結ぶといふこと、二重外交を弄するといふことは、支那に取つて結局百害あつて一利なきものであるといふことは、支那人には分からないやうである。條約を守る精神がないといふことはまた法律を守る精神がないといふことにも連關し、あらゆる問題の解決を不可能ならしむるのである。

七

第五卽ち最後の原因は、支那にはどうも偉大な人物がないやうに思はれることであ

る。昔は支那には隨分偉大な人物が輩出した。近くは長髮賊の亂の時などには、僅かに湖南省の湘鄉といふ一縣からでも多く人物は輩出した。此等の人物が指揮したところの湘軍の旌旗は十八行省に遍しといはれたのもこの時である。それだのに今日はさういふ偉大な人物は見當らないやうである。遠見達識の士はどうもないやうである。私は昔において支那に立派な人物があつたのは、昔においては支那の最も貴重なもの、最も價値の多いものが貴ばれた爲めである、即ち道德的な精神的文化が大切にされた爲めである、それに反して、今日において支那に人物がないのは、支那の最も貴重なもの、最も價値の高いものは大切にせられずして、却つてつまらない價値のないものが貴ばるゝ爲めでないかと考へるのである。道德的、精神的な文化が貴ばれずして、支那の帝政の遺產としては最もつまらない大きな領土を恢復したいといふやうな考へが貴ばるゝ爲めでないかと考へるのである。

北支那の自治と其の發展性

一

北支那における地方自治の運動は、今年春夏の際の北支那問題以來醞釀しつゝあつたが、十月の香河縣民の自治要求、縣署襲擊の事件も案外あっけなく終熄したので、早急には實現しさうもなく思はれたのに、十一月廿四日殷汝耕君の塘沽停戰協定による停戰區域及び非武裝地帶二十二縣の自治宣言となつて表面化したことは少なからず世界の視聽を驚かしたやうである。殷君のこの一擧は果して陳勝、吳廣の蘄の一擧が秦の天下の土崩瓦壞となつた如く、また武昌の一擧が清の天下の土崩瓦壞となつた如く、河北全省の自治乃至北支那三省或は北支那五省の自治となつて擴大延及し、勢ひの及ぶ所、終に國民黨の天下の土崩瓦壞に導くやうな虞れがないか。國民黨の天下は決して磐石の基礎